



ワールドトークRPG! 3

W O R L D T O K U R P G !

しろやぎ
Shiroyagi

アルファライト文庫





石井先輩

テーブルトークRPGのマスター。事故で死んで『アータレウ』の神になった。

アーティア

ウォルスタの商業神殿殿長。
守銭奴。メテオの仲間。

ハム

ウォルスタ自警団長。
武器マニアな戦士。
メテオの仲間。

ユルセール V世

ユルセール国王。
メテオたちの
抹殺を企む。

ラス・バルムンク

通称“ストームプリンガー”。
オーバーレベルの剣士。

メテオ・ブランディッシュ

本編の主人公。伝説のパーティ「流れ星」の
リーダーで、ウォルスタの魔術師ギルドの長。

エステル

メテオの弟子で
魔術師。
賢者レベルが高い。

リーズン

ウォルスタの領主。
エルフで精霊使い。
メテオの仲間。

ガルーダ

リトルフィートの盗賊。
メテオの仲間で
トラブルメーカー。

メル

メテオの護衛をしている戦士。
無邪気な性格。

主な
登場人物
Main
Characters

1 役割

メテオが亡霊都市アヴィールドで『不死の王』と激突する少し前のこと——
 《転移》^{テレポート}の魔法を使い、メテオをアヴィールドにほど近いカザンの町へと飛ばしたエステ
 ル。初めて使う《転移》^{テレポート}であったが、魔術師として今まで培^{つく}ってきた経験が成功を確信し
 ていた。

「お師匠様……ご武運を」
 「お師匠様……ご武運を」^{ぶえん}

冷静に考えれば、『不死の王』^{デスロード}と一騎打ち^{いっきうち}なんて正気とは思えない。

『不死の王』^{デスロード}というアンデッドは、古代から生き続ける一部のドラゴンや、魔界のデーモ
 ンロードとも肩を並べる災害^{わざ}みたいな魔物。本来なら、英雄と呼ばれる人間や最高位の冒
 険者たちが集まって打倒^{だとう}すべき相手。

しかも、今^{あたい}相對^{たい}しようとしている『不死の王』^{デスロード}は、プリンガーの称号を持つ者だ。
 だが、それでもエステルには、メテオが負けるところなど想像もつかなかった。

ほんの数日、冒険と呼べる戦いをもにただけでも、メテオの魔力が底知れないこと
 がよくわかったからだ。正直、エステルの想像をはるかに超えていた。人間が到達できる

アータレウRPG

キャラクター名

メテオ・ブランディッシュ

種族名

ヒューマン

性別

男

年齢

26 (16)

職業属性

魔法使い

LV スキル名

17	魔術師
3	賢者
10	精霊使い
10	神官
10	盗賊
1	ゲームマスター

経験点

717,560

所持金



キャラクターの肖像・特徴

重要なアイテム等

- ・無限の草袋
- ・魔術師の杖
(魔法の発動体)
- ・リング
(魔法の発動体)

...etc

STR
36DEX
36AGI
34INT
118VIT
114MND
518

ところよりも、さらに先に行行ってしまっているようにさえ思える。

本当であれば弟子として、いや、力なき者が力ある者を前にするように、もつともっと畏まり、畏怖すべきであったかもしれない。

だが、メテオの奔放さが、エステルに畏まりすぎることを許さなかった。悪くいえば、最高位の魔術師としては落ち着きがなく、子供っぽくて感情的なだけかもしれない。

（今のお師匠様には、昔感じたような陰りがなくなった。ウォルスタを作ってから、冒険と修業の果てに身につけた魔法の力と立場が、いつもお師匠様を苛んでいた。一步一步身につけてきたものが、重くてたまらない。そんな……）

先ほどまでメテオが立っていた場所を眺める。心の問いかけは止まらなかった。

（今のお師匠様は、無欲で平和な方が強大な力を手に入れたかのような感じ。力に執着せず、日々平凡に楽しく過ごせばいい。——そんな、庶民でしか持ち得ない、持たざる者にしか得られないような、純粹さが……）

「エステル？ あなた、どうしたの。ぼんやりしているけど」

ベッドにいる、メテオの仲間で神官のアーティアに声をかけられると、エステルはハッとして背筋を伸ばした。

「い、いえ、なんでもありません。お師匠様が無事帰ってこられるようにと思っただけで」

「……メテオなら大丈夫よ。なんだかよくわからないけど、魔術の他にも神の加護やらなにやら受けているみたいだし」

「……はい」

まだ、肉体と魂が分離しているような感覚があるのか、うまく身体を動かせないアーティア。

痛みに眉をひそめつつ、ベッドのふちに腰をかける。それだけの動きでもえらく難儀なのが見てとれた。

「アーティア様、ご無理をなさらないで」

「エステル。あなた、メテオと初めて会ったのは三年くらい前よね。もう、わたしたちが『流れ星』として名前が売れていた頃」

「えっ。は、はい。その頃だと思えます」

突然アーティアが今までと違う話題を振ってきたため、エステルは少し困惑した。

「あなたにとって、今のメテオはなんだかバカっぽく見えるかもだけど、あなたと出会うちょっと前までは、あんな感じだったのよ、あいつ」

「ええっ。昔のお師匠様ってあんな感じだったんですか!? でもどうして……」

「あいつ、外見こそ子供になっちゃったけど、実年齢はわたしとそう変わらないのは知ってるわよね。……そうだった経緯は省くけど、外見が子供になったことで、周囲に舐めら

れないようずいぶん気を遣うようになったのよ。それまで誰に対してもタメ口だったのに敬語とかも話したりするし、落ち着いた感じの表情でいることが増えたり、けっこう苦労していたのよ」

「は、初耳です」

「そりゃあ、いちばん威厳を保たなきゃいけない弟子の前じゃあね」

優しく微笑むアーティア。こっそりと「わたしがこんなこといったのは秘密よ」と、唇に指を立ててみせた。エステルにしてみれば、神殿の長であるアーティアがこんなお茶目な仕草をすることにも驚いた。

「なにながあったか知らないけど、今のメテオの振る舞いっていうのは、若いころのメテオそっくりなのよ。偉い人の前で礼儀を尽くすことも知らず、ただ冒険のためだけに魔法を使い続けて、わたしたちといっしょに馬鹿で無謀なことばかり続けてきたメテオ」
懐かしそうに目を伏せたアーティアは、昔を思い出しているようだった。

「人は誰しも演技をしているの。魔法使いの演技。戦士の演技。盗賊の演技。素の自分にいろんな立場や役割が乗って、それが自分になる。わたしだって『商業神殿の長、アーティア・ソルディア』という役割を持った人間。けど、本当の自分は『ただのアーティア』」
「……………」

「でも、なかなか素直にはなれないものよ。メテオもそうだった。ウォルスタができてか

らは、わたしたちの中では彼が一番ガチガチに役割を演じていたのかもしれない」

「……役割を演じていた。それは、魔術師ギルドの長として、師匠として、ということでしょうか？」

「あいつの心のうちまではわからないけどね。ただ、わたしがわかるのは、今のメテオは『冒険者を始めたころの』メテオであるってことくらい。エステル。あなたにはショックかもしれないけど、アレが本来のメテオ。『流れ星』のリーダーであり、魔術師にして冒険者、そしてウォルスタ魔術師ギルドの長、メテオ・ブランドイッシュの素顔よ」

これまでエステルは、今のメテオに対して嫌悪はしていないものの、戸惑いはあった。以前のメテオよりも気安くて心の壁がない。

それはわかっていたが、前世の記憶や記憶の混乱でこうなったというのは、どこか腑に落ちないところがあつたのだ。《嘘感知》も使い、その言葉に嘘がないこともわかっていたし、なによりエステルの勘が偽者という可能性をはなから除外していた。にもかかわらず、である。

それが今、ストンとあるべきところに落ち着いた。

（あれが、本来のお師匠様）

師としてのメテオではなく冒険者としてのメテオ。

それはまるで、父や母が親であると同時に、ひとりの男女であるように、師もまた別の

顔があるということだ。

戸惑いは消え、別の感情が生まれているのに気づいた。

「えへへ。ちょっと嬉しいです。お師匠様が無理してわたしに合わせてくれているんじゃないかと、あれが本当に本当のお師匠様なんですネ」

「メテオは、あなたが思っている以上にバカよ。せいぜい嫌いなならないであげて」

「大丈夫です、わたしお師匠様大好きです!! 言葉遣いがそれっぽくないところも、すごい魔術師なのにちっともそんなふうに見えないところも!! ちよつとエッチなところもありますけど……大好きです!!」

「……そのエッチなところを、もつと詳しく教えてちょうだい」

キラリ。アーティアの目が鋭く好奇心に光ったところで、エステルがハツとなにかに気づいて耳を押さえた。

「ロルト様? はい、今は神殿でみんないます……すぐですか。わかりました、みんなに伝えて移動します!!」

魔術師ギルド三導師のひとり、ロルトじいからの《精神感應》が届いたのだ。

彼は今、『流れ星』の一員でウォルスタの領主リーズンとともに、領事館にいる。

「何か動きがあったの?」

「ロルト様から連絡です。リーズン様たちとともに北門に移動するので、高位魔法が使える

で戦える者は、急いで合流するように……とのことですよ」

「噂のストームプリンガーが近づいているのかしら。メテオがいなくなつてすぐに事が起こるあたり、完全にこの町は狙われているわね」

「わたし、ギルドのみんなや、ガルダさんたちを連れて合流してきます!!」

「待つて、わたしも連れていつて」

と、ベッドを立とうとしたアーティアだが、全身が痛むのか苦悶に顔を歪める。

通常ではあり得ない、魂の破滅からの再生を果たした上に、魂と肉体を繋げる過程にいるアーティアの身体は、通常の行動ですらまともにできないでいる。おそらく、しばらくは神聖魔法を使うことも叶わないだろう。

《願う》の奇跡ですら、死から再生した代価を完全に解消することはできなかったようだ。「アーティア様はまだ戦える状態じゃありません。わたしたちに任せてください」

「——でも……痛ッ!!」

「わたしひとりじゃありません。メルもガルダさんも、リーズン様たちもいます」

「……………」

『流れ星』の皆様たちが育てたウォルスタです。お師匠様とアーティア様、お会いしたことはないですが、マリアージュ様たちに代わつて、この町に育ててもらった恩を少しでもお返すするため、わたしたちに頑張らせてください」

じつと見つめるエステルの瞳を覗きこみ、アーティアは静かに頷いてみせた。

「……『流れ星』に代わってとは、大きく出たわね」

「す、すみません。決してその、皆様の代わりになれるとは思ってませんが、少しでも頑張らせてもらおうと……」

「その引き出しを開けてご覧なさい」

有無をいわさぬ調子のアーティアは、視線を戸棚に向けて小声で何かを呟いた。すると、引き出しのひとつからカチャリと鍵が外れる音がした。

魔術師が使う《魔法錠》だ。決められたキーワードを唱えないと鍵を開けることができない。魔術師ではないアーティアのことだから、どこかでメテオに頼んで魔法をかけてもらったのだろう。

「アーティア様。これって……魔石!？」

「ええ、何かあったときのための秘蔵の石。引き出しごと、みんな持っていていいから、絶対に死ぬんじゃないわよ」

棚の中には大ぶりの魔石が数十個。使い捨ての魔力蓄積装置である魔石は、小さなものひとつだけでも一般市民の年収レベルの高額で取引される。これだけの大きさと数であれば、豪邸の一軒二軒は軽く建てることできるだろう。

「アーティアさ……」

「急ぎなさい!! お金はこういうときのために使うもの。遠慮せずに、使い切るつもりでリーズンたちに合流なさい!! そして、あなたはあなたの役割を果たしなさい」

アーティアの気迫と言葉に、エステルは自らの言葉を呑みこんだ。

そして、一度だけお辞儀をすると、引き出しごと抱えて部屋から出ていった。

「……メテオの弟子かあ。わたしも弟子のひとりでも育てておくんだったわ」

エステルに連れられたメルやガルダの騒がしい声が遠ざかるのを聞きながら、アーティアは嬉しいような寂しいような表情で息をついた。

「神よ、あの者たちに幸運の導きを……」

「ぶみゃー……お」

アーティアの祈りの言葉は、聞き慣れた猫の鳴き声中で中断された。

猫屋敷の看板猫コーデリアが、開けっ放しにされていた部屋の扉をするりと抜けて、いつものふてぶてしい鳴き声を上げたのだった。

長いことこの猫を見てきたアーティアであったが、扉から入ってきたのは初めてだったのでびっくりした。

いつもは施錠をしているということもあるが、コーデリアがアーティアのところに来るときは窓から、しかもそれは何か用事があるって彼女を呼びつけるときだけだったからだ。

「……コーデリア。悪いけど今日は動けないわ。メテオのお陰でウォルスタの人間も猫も、みんな元気になつたはずよ。こんなときになにをしに来たの?」

「ごみャー……」

コーデリアは姿に似合わぬ跳躍でアーティアのベッドに飛び乗ると、普段と変わらぬふてぶてしい顔のままそこで丸まった。肥満体で白い毛並みのコーデリアがこうすると、巨大な饅頭にしか見えない。

「……もしかしてわたしを心配してくれているの?」

アーティアの問いかけにゴロゴロと喉を鳴らす。これも、コーデリアという猫には滅多にないサービスであった。

猫の体温、こと超弩級サイズのコーデリアが発する熱を感じて、アーティアは身体から緊張が抜けていくのを感じた。

(エステルだけじゃなくて、コーデリアにまで心配されたというわけね)

情けないとは思わなかった。

自分には肩を並べた仲間がいて、その仲間が育んだ子らがいて、おまけに猫まで自分を思ってくれている。

(こんなに嬉しいことはないわ)

これまでの出会いと幸運。そしてこれから起こることについて。

アーティアは万感の思いを込め、先ほど中断された祈りを再開するのだった。

2 ウォルスタ攻防戦

「来たか」

ウォルスタの北門にエステルたちが集まったとき、リーズンが呟いた。

領事館で待機をしていた彼のほか、ハム、ロルトじい、リコッタはすでに門へ来ており、ウォルスタのはるか北の森まで続く平地を深刻な顔で睨んでいた。

「ニヤンですか!! あのぐるぐるしたのは!?」

メルが素っ頓狂な声を上げて、遠くを指差した。

この場に集まった全員が、まさかと思いつつもその正体に気がついていてた。

巨大な竜巻が六本。このウォルスタに向かって等間隔に広がり、まっすぐ進んでいるのだ。

「じいも長く生きとりますが……あんな巨大な竜巻が六本もまっすぐ進んでくるなど、初めて見るのう」

ロルトじいも険しい顔で竜巻を睨んでいる。

天空に漏斗状の雲があり、そこから続く象の鼻のように長くてうねうねと曲がったチューブ状のものが、接触するすべてを蹂躪する。

竜巻は、進行方向にある街道の石畳や樹木を、子供がオモチャを放り投げるかのように上空へと打ち上げる。もちろん上空数百メートルから地上に落ちるのだから、生き物に限らず建造物などもひとたまりもない。

「あの竜巻、まだ遠いけどずいぶん早くこっちに来るよう。十分もしないでウォルスタに直撃？　みたいな感じだよ」

「ふん、ガルダ。その時間は確かか」

「おいら、こういう自然現象のことは得意なんだよう。リーズンだって知ってるでしょ」

「まあな。で、あの竜巻はどうしたらいいと思う」

「おいらなら逃げるね」

「……ロルト翁。意見を伺いたい。あの竜巻を魔法でなんとかすることは可能か？」

早々にガルダの意見に見切りをつけ、リーズンは魔術師ギルドの碩学であるロルトに意見を求めた。

「残念じゃが、魔法で直接あの竜巻を解除するようなことはできぬ」

「では、間接的にはどうにかなるのですか？」

「強力な広範囲の攻撃呪文を連続して竜巻に叩きこめば、その勢いを相殺できるかもしれぬ」

リーズンはわずかに目を伏せ思考を巡らせたのち、宣言した。

「ウォルスタ領主として、この場はわたしに仕切らせてもらおう!!」

今この場にいる全員をざっと見回す。

「アーティアとメテオがいないが、何か非常事態か？　先の奇跡みたいな光の魔法と何か関係があるのか」

「リーズン様。話が長くなりますので結論から申し上げます。アーティア様の生命に別状はありません。しかし、今は動くことも魔法を使うことも叶いません。お師匠様は単身アーヴィルドへ、ベストブリンガーを倒しに向かっております。そしてあの光の奇跡は、お師匠様の奥の手とのことです」

エステルがそう答えた。

「うむ、簡潔だ。ふたりとも無事であるなら安心だ」

（この非常事態に、よく冷静に物事を把握している）

と、リーズンはエステルの発言に対し、内心で感嘆した。

（この場を無事に切り抜ければ、リコッタともいい仲間になれることだろう）

自らの愛弟子のことを思ったが、すぐに頭を切り替えて言葉を続けた。

「ならば、今ここに集った者たちが、ウォルスタでの最強戦力といえるだろう。この人員

で今からあの竜巻に対応し、その背後にいるであろう『ストームプリンガー』の攻略も行わなくてはならない」

初めに見たときよりも明らかに近づいてきた竜巻を示して、リーズンは対応策を伝える。「現状、竜巻を無効化する方法は、強力な広範囲攻撃呪文を叩きこむことしかない。そこで今いるメンバーを三隊に分けて、それぞれが受け持った竜巻をなんとかしても消し去る。あの六本の竜巻がひとつでもウォルスタに届けば俺たちの負けだと知れ」

リーズンの言葉に、この場にいた全員が了承の声やリアクションを取る。

一本でも竜巻が町を襲えば、ウォルスタは壊滅する。

みんなも、それをわかっているのだ。

「最右翼の竜巻の一本。これをロルト翁を筆頭に、魔術師ギルドの三導師で受け持っていたきたい」

「承知した」

ロルト、フィリア、オリナス、彼らは魔術師ギルドの三導師と呼ばれるが、三人とも強力な範囲攻撃魔法を操ることができる。

「最左翼の一本。これをエステルとリコッタでなんとか対応しろ。メルは俺たちと一緒に来い」

「は、はい!!」

若手の三人のうち、攻撃魔法を使えるのは、エステルとリコッタのふたり。メルは前衛型なので、ハムやガルダと行動させる。

それを知ってか、オリナスがリーズンに提案をする。

「リーズン殿。若手ふたりでは荷が重すぎるのでは？ よければ俺が左翼に移っても構わないが？」

「心配無用。オリナス殿、もはやこの三人は、俺たち『流れ星』がこの町を作ったときの実力に匹敵する。エステル、やれるな……?」

「……はい。やれます!!」

「それでこそ『流れ星』の二代目だ。任せたぞ」

「ににに、二代目なんてそんな!!」

顔をぶんぶん振って恐縮するエステルだが、そんなことはお構いなしに話を続ける。

「ハム、ガルダ、メル、そして俺が、中央で四本の竜巻の相手をする」

リーズンの作戦に、ロルトじいが難色を示す。

「リーズン殿。ハム殿とガルダ殿とメルは、魔法を使えないのでは……? ひとりで竜巻四本を相手取るおつもりか」

「ああ。ハムたちには、竜巻を消したあとに出てくるであろう『ストームプリンガー』の相手をしてもらうつもりだ。竜巻は俺ひとりでなんとかしよう」

「危険じゃ!! わしら三導師が全力で魔法をぶつけて竜巻を消せるか消せないかという規模。一度メテオ殿に《精神感應》で連絡を取って、こちらに戻ってきていただくほうが確実じゃ」

「それは駄目だ」

「なぜじゃ? ベストプリンガーがまき散らした病気は解消されておる。ここは全戦力で目の前のストームプリンガーを打倒すべきではないか」

「ベストプリンガーに逃げられて、もう一度同じことをされたとき、ふたたびウォルスタを守るかわからない。あの奇跡の光がそう何度も使えるとは思えない。ベストプリンガーとストームプリンガーが連携を取っていた場合、作戦が失敗しても命が無事なら、一度引いて再度波状攻撃を加える。少なくとも、俺はそうする」

すらすらと言葉を並べるリーズン。

「メテオがベストプリンガーを倒し、俺たちがストームプリンガーを倒す。次はない。今ここで決着をつけないければ、守るものが多い俺たちの負けだ。きつと、メテオもそれがわかってる。だから、単身でプリンガーに向かっていったのだろう。おそらく敵の狙いも、戦力の分断だ」

「……なるほど」

「それに、俺とて『流れ星』の最大火力を担当していた精霊使いだ。侮ってもらっては

困る」

平素、むすつとしているリーズンだが、このときばかりは本当に心外だったのだろう。声にも熱がこもっている。

「万能型のメテオに対して、俺は純粹に相手を打ち負かし、ダメージを負わせることが得意だ。ある意味ここは俺の見せ場だろうな……イーフリートよ、姿を現せ」

右手を一振りして何者かに呼びかける。指に嵌められていたミスリル銀製の指輪から豪炎がほとばしり、紅蓮の炎を身に纏った巨人が姿を現した。

「久しいな、リーズンよ」

「イーフリートよ。しばらくぶりだが、ともに思い切り暴れようか」

「相手はどこのだいつだ?」

「あの竜巻を消す。見たところ風の上位精霊ジンの力で生み出されたものではないようだが」

「うむ、普段よく見るあの忌々しいつむじ風とはまた別物のようだ。いいだろう、久しぶりの召喚だ。ひと暴れしてくれる」

突如現れた炎の上位精霊——イーフリートと親しげに言葉を交わすリーズン。その様子を見たりコッタが、ロルトやエステルたちにつっそり耳打ちする。

「リーズン様は、エルフには珍しく炎の精霊を好んで使われます。あれはリーズン様が契

約を交わしている炎の上位精霊のイーフリート。その力は成竜に匹敵するでしょう」

「——そういうわけだ。俺のことは心配ない。みんな、急いで移動を開始してくれ」

「あ、リーズン様。アーティア様がこれをみんなに使ってくれと」

エステルが、引き出し一杯に入った魔石を出す。

「アーティアめ。こんなに魔石を溜めこんでいたか。俺とロルト殿とエステルの部隊で三分の二ずつ持っていこう。商業神殿の長からの贈り物だ。優先的に魔石から魔力を引き出し、自前の精神力は温存しておくように」

魔石はたくさんあった。魔法使いたち全員で分けても、ひとりが大きい魔法を十発分という感じであろうか。特に先のベストプリンガーの疫病騒ぎで大きく精神力を削られていた一行にはありがたい。

「時間がない。とにかく急いで行動に移ってくれ。——健闘を祈る」

短く言葉を発し、リーズンはイーフリートとともに竜巻へと向かっていった。

それに倣って、ロルトじいとエステルのパーティも、左右に分かれて受け持つべき竜巻へと向かった。

3 ウォルスタ三導師

自警団のリーダーであるハムの指示で、ウォルスタ北門に馬が集められていた。

そのおかげで、リーズンたちは竜巻が町に接近してくる前に、こちらから接近することができた。地味ながらハムのファインプレイといっているだろう。

最右翼の竜巻を任された魔術師ギルド組。この町では『流れ星』の次に有名な『三導師』だ。その中でも、ギルド長のメテオ・ブランドイッシュについて魔術を極めているロルトじい。馬に跨った彼は、ハムの周到さに感心をしていた。

「メテオ殿の仲間とはいえ生粋の戦士。武張った男かと思いきや、なかなか渋い動きをしておる」

この世界では、すでに老境といつて差し支えないロルトじいであるが、手綱捌きは矍鑠としたものだった。

「し、しかし、ロルト様がこうも馬を操れるとは意外でしたな」

隣を走る三導師のひとり、オリナス・メリングは、騎士のような顔立ちの魔術師にして、知識神を信仰する神官でもある。こちらは外見のわりに、いくぶんおっかなびっくりとい

う感じで、乗馬をこなしている。

「なんじゃ、オリナス。お主はまだ若いくせに、乗馬のひとつも満足にできぬのか」

「わたしは若い頃から本の虫でしたから……なッ!! おお怖い。それに、わたしはもう四十三歳ですよ。この歳で馬を早駆けさせるとは思いませんでした……ッ」

ところどころ馬のリズムに言葉を途切れさせつつも、会話する余裕はある。この世界において、ある程度の立場のものであれば、乗馬は嗜みのようなものだった。オリナスも決して得意ではないが、馬を走らせることくらいは問題ないようだ。

「四十三で若さを語るとは片腹痛いわ。あと二十も歳を重ねてから抜かしおれ……それに引き換え、フィリアの乗馬は堂に入ったものだわい」

「エルフで馬に乗れない者、弓を扱えない者、精霊と交信できない者はおりませんことよ」

言葉の真偽はともかくとして、三導師中でもっとも華麗に馬を乗りこなしているのはフィリア・ティリスに間違いはない。

ついでに年齢も最も……と、ロルトじいは心の中で呟いたのだが、声にするほど無粋ではなかった。エルフの寿命は、人間のそれと比べものにならない。外見だけでいえば、フィリアは未だ二十代後半の容姿を保っている。

「ロルト様、竜巻が近づいてきましたが、どのようにいたしましょう」

オリナスが問いかけた。

「力押しになるの。《火球》を複数呼び出し、竜巻に対して垂直に三発。射程範囲に入ったらこれを限界まで行う。全員魔石を持つておるな?」

オリナスとフィリアは頷いてみせる。導師クラスの魔術であっても、《火球》を一度に三発となると負担は大きい。普通なら三回も使えば精神力が底をつくだろう。

魔術師が使う広範囲破壊呪文としては、《隕石落とし》を除き、基本にして究極である《火球》だが、果たしてあの巨大な竜巻に対して何発当てればいいのか……

迫りくる竜巻は、ロルトじいをしてそう思わせる。攻撃魔法を叩きこむというのは、単純に風の勢いを止めるという意味で、他に有効そうな手段を思いつかなかったのだ。

こうなってくると、魔法を使えない者や、最低でも《火球》を使えない魔術師はなににもできない。自分たち三導師がなんとかしなければという思いは、いやが応にも増してくる。「ここで止まろう。馬を下りて呪文に集中するぞ」

ロルトじいが馬を下り、ふたりもそれに倣った。馬は不安げにしていたが、三導師の後ろに隠れるように回りこんだ。もつとも《火球》の魔法がひとたび発動すれば、並の馬は音に驚いて逃げてしまうだろう。馬を下りたのはこの先役に立たない、ということでもある。

「魔法は僕に合わせろ。いいか、一度魔法を使えば撤退はない。竜巻に呑みこまれるか、

竜巻を消し飛ばすかじゃ……オリナス、フィリア、覚悟はよいか？」

「いつなりと。知識神への祈りは済ませておりますゆえ」

「わたくしも問題ありません。みなで作った魔術師ギルドとこの町を守りましょう」

「うむ、それでは魔法の準備を!!」

ロルトじいは自分の背丈ほどの杖を。

オリナスは知識神の信徒を表す刻印を入れた棒杖を。

フィリアは銀の腕輪を通した腕を前に差し出した。

それぞれが得意な魔法の発動体を構えて、そのときを待つ。

「今じゃ!!」

「三出でませい。天を焦がす炎と石壁崩す衝撃よ。爆ぜて散れ。《火球》」

三人が繰り出した、合わせて九つの火球が竜巻へと撃ち出される。

およそこの世界では、この呪文以外では聞けないような爆発音と熱風に、今まで不安に耐えていた馬たちの我慢が尽き、ひととき高く嘶いて遁走する。

「まだじゃ!! 勢いすら弱まった感じがせぬ!!」

「三——《火球》——!!」

「もつとじゃ!! 気絶するまで撃ちこむぞ!!」

続けざまに、火球は竜巻にぶつかっていく。

さしもの三導師も、ここまで魔法を連発したのは初めての経験だった。

それもそのはず。すでに自前の精神力では実現できないほどの魔法を使っている。魔力を吸い上げられて、次々と粉々になっていく魔石。三人は間断なく《火球》を使い、目の前に城壁のような炎の弾幕を作る。

もし、一歩下がってこの光景を冷静に眺めたら、《火球》の弾幕が当たるたびに、竜巻の進行速度と勢いが収まっていくのがわかったはずだ。

しかし、三導師には、そういったことに気がつく余裕などなかった。

「——くっ。最後の魔石が砕けたわ」

「フィリアもか、わたしもだ」

「オリナス、フィリア、あとは自前の魔力がものをいう。ふんばるのだ!! ウォルスタの三導師の名前にかけて!!」

アーティアより預かった魔石を使い果たし、残るは真正正銘、すべて自前の精神力による魔法だ。これが尽きればどうすることもできない。

「三——《火球》——!!」

「三——《火球》——!!」

「三——《火球》——!!」

三人が三発ずつを三回。計二十七発の火球を竜巻に撃ちこんだところで、フィリアの身

体が支えを失ったように地面へ崩れ落ちた。

「ロルト様、フィリアが！」

「フィリアはメテオ殿の部屋で精霊を使っている。そのぶんの疲労が溜まっていたのだろう」

倒れる仲間を支えることもできず、ふたりは魔法を使い続ける。

「——『ファイアボール火球』——！」

「やったか!？」

幾度となく撃ちつけられる火球に、ようやく竜巻が目に見えて弱くなってきた。それが証拠に、今まで魔法による爆炎と煙が竜巻によつて即座に吹き飛ばされていたのに、今では視界を一部封じるくらいまで煙が立ちこめている。

「ロルト様、わたしはこれ以上『ファイアボール火球』を撃つ魔力が……」

「任せい。儂が最後を決めてくれよう」

魔術師レベルが他のふたりよりも高いロルトじいだが、もはや大きなつむじ風といった竜巻に向け必殺の気を込めて魔法を放つ。

「——『ファイアボール火球』——！」

魔法は狙いを違わず竜巻へと直撃して炸裂する。

「……やったか」

だが、わずかに竜巻と思われる根が残っていた。

それは、ロルトじいたちが見ている前で、みるみる勢いを増していった。

このままでは、また巨大な竜巻として成長してしまう。

「ロルト様……あと一撃です」

「……今の魔法で儂も打ち止めじゃ。『ファイアボール火球』はおろか、『エネミーボルト魔弾』の一発も放てば気絶してしまっただろうて」

ロルトじいの顔が無念に歪んだ。

「なればせめて奇跡を信じ、『エネミーボルト魔弾』を放って散るも一興か……」

「ロルト様」

オリナスがロルトじいの肩を掴んだ。

「わたしの心の力。すべてお渡しいたします。どうか、どうかウォルスタを……」

《スピリットリバイブ精神賦活》

オリナスが崩れ落ちた。自らの精神力を他人に譲り渡す神聖魔法だ。

「オリナスめ。格好を付けおって……」

倒れたふたりを見て、ロルトじいにはやりと笑う。

ふたりとも意識を失っているだけで、外傷はない。一日安静に休んでいれば、精神力は回復するであろう。

「出でませい。天を焦がす炎と石壁崩す衝撃よ。爆ぜて散れ……」
この呪文だけは、失敗するわけにはいかない。

(しかし、ここまで本気の極限で魔法を使うことなど数十年ぶりじゃな……若い頃を思い出すわい)

生涯で数えるほどしかしてこなかった神への祈りを込め、呪文を完成させた。

「――『火球』……!」

4 新しい力たち

「こんな形で初のパーティプレイになっちゃったね」

エステルは、馬を巧みに操るハーフエルフの同年代に微笑みかける。

「わたしもびっくりです」

馬から伝わってくる心地よい振動を感じつつ、リコッタも気が負いがない。茶色いスカートに白いブラウスという、領事館で働いている姿のままであるが、動きにくさなどは微塵も感じさせない。エルフの血が、人馬一体を助けているのであろうか。

エステルは、リーズンからふたりで竜巻をなんとかしてこいといわれて、どうなることかと不安だった。

なにしろリコッタとは旧知の仲とはいえ、こんなに逼迫した場面で行動をとにもするのが初めてだったからだ。

つい先日のことである。

「あつ、あの、リコッタさん。よかったらわたしたちと一緒に冒険者やりませんか!」

メテオとともにウオルスタに戻ったあの日。冒険者としてやっていこうと心に決めたときから、エステルは頭の中で、パーティメンバーになってもええそうな者を、リストアップしていた。その筆頭がリコッタ・セントクロアであった。

だからメルとともに、ウオルスタ領事館で働くリコッタにそう声をかけたのだ。メテオと『流れ星』で苦楽をともにしたリーズン・エル・フィランド。その弟子であるリコッタを誘うのは、エステルにもメルにも異論があろうはずもない。

「……よく、事情が呑みこめないのですが」

冷静に切り返したリコッタは、お茶などを振る舞いながら、要領を得ないエステルと、言葉足らずのメルの話を辛抱強く聞き出し、ようやく合点がいった。

「わたしはリーズン様の弟子であり、領事館秘書みたいなものですので、即答はできま

せん」

想像はしていたものの、即答をもらえずにがっかりしたふたりだったが、リコッタは意外にも乗り気であるようであった。

「なので今、リーズン様にお伺いを立ててきますね。少々お待ちください」

そういつて席を立ち、再び戻ってきたときには、いくぶん晴れやかな顔で吉報を告げた。「リーズン様にはご快諾いただけました。これからよろしくお願いいたします」

どこか遠くで壁か何かを殴る音とともに『メテオの野郎!!』といった罵声(ののしり)がしたのだが、無事にパーティメンバーを加えることができたエステルとメルの耳には届かなかった。

「リコッタさんって、わたしが思っていたよりずっと落ち着きがあつて、即断即決(すぐだんごけつ)なんだなーと思います」

エステルが、ぼつりと漏らす。

「そんなことはありませんよ。わたしも、いずれはリーズン様のような精霊使いになりたいと思っていました。ですからエステルさんのお誘いを理解したとき、本当に嬉しかったんです。だからあんな――」

リコッタは、リーズンと交わした話の内容を思い出して言葉を切った。念願の冒険者になりたいというチャンスに、つついりリーズンへ無茶で性急なお願いをしたことを自覚し

ているのだ。

「それはともかく、せっかく冒険者としてパーティを組んだわけですから、『さん』付けはやめませんか？ わたしのことはリコッタと呼んでください。わたしもエステルと呼ばせていただくので」

「では、年上の女性だからと遠慮していたんですけど、改めてよろしく願います、リコッタ!!」

女性？ 思わずリコッタは不審な顔をしそうになった。エステルが自分のことをよく知らなかったことに虚を衝かれたのだ。てつきり、リーズンがそれとなく伝えているのだとばかり思っていたが……おいおい事情は説明していこう。なにしろ、今はそれどころではないのだから――と、言葉を呑みこむ。

「竜巻が近いです。そろそろ馬を下りて魔法を使う態勢に移りましょう、エステル」

「ええ。それにしてもリコッタ。その……言葉遣いも、もっと碎けた感じでも構わないんだけど」

「言葉遣いはこれで普通なので、気にしないで。職業病みたいなものの……」

馬から下りてすまなさそうにするリコッタ。長くリーズンのもてと秘書のように領事館の接客などをしていたので、どうしてもしゃほこばった受け答えになってしまうのだ。

実際、同年代の友達といえるのはエステルとメル、そしてもっとも身近な『あいつ』くら

いだ――

なんにせよ、余計なことを考えている場合ではない。竜巻はあと数分もせずに呪文の射程に入るだろう。今はもつと実務的な相談を交わすべきだ。

エステルも同じように考えたらしい。

「わかった。ところでリコッタは、リーズン様みたいな精霊は操れるの？」

分かれる前にリーズンが見せた炎の上位精霊、イーフリート。あれこそ、精霊魔法を極めた者の証である《上位精霊支配》。四大精霊の王ともいえる存在を自在に操ることができる究極の精霊魔法だ。

「力を借りるだけならともかく、上位精霊の支配はできない。下位精霊であれば水の精霊ウンディーネを従えているけれども、いつもは上下水道の水質浄化をやってもらっていて、今は連れている……」

リコッタはすまなそうに呟いた。水の精霊ウンディーネは、その特殊能力で汚水を真水に変え、生水をおいしい飲料水に変えることができる。町の生命線を守る仕事で、以前はリーズンが受け持っていたのだが、《下位精霊支配》を使えるようになってからは、リコッタがその仕事を受け継いでいた。

「でも大丈夫です。広範囲の攻撃魔法は習得していますから。竜巻に《大旋風》を当てて、勢いを削ぎ落とします」

「わたしは撃てるだけの《火球》を撃ちます。でも、魔法が重なると竜巻にダメージが通りにくいかもしれないので、わたしは下半分を狙います。リコッタは上空の広い範囲をお願い」

「わかりました」

徐々に近づいてくる竜巻に気圧されまいと、ふたりは気を張る。魔法の射程に入ったら、あとはもう魔力に込められた魔力と、自前の精神力が尽きるまで撃ち続けるだけだ。

「大きいですね……止められる気がしないです」

リコッタは素直な感想を口にした。《大旋風》は、風の上位精霊の力を借りて発現させる上位の精霊魔法。初めて使ったときにはその威力に感動し、自分も精霊使いとしての高みを垣間見たと感じたものだ。

だが、目の前でたうつ蛇のような竜巻に対し、自分が生み出せる風の力など微々たるものに限った。

「大丈夫。ふたりいれば止められるよ」

エステルが、ハーフエルフの震える手を優しく握る。精霊使いとしてはレベルの高いリコッタだが、冒険者としての活動はなく、当然このような超常現象じみた事態に直面したことはなかった。

対してエステルは、メテオといっしょにクラウドドラゴンと戦い、『不死の王』という

破格^{はかく}の存在も目にはしている。本人は気がついていないのだが、自分よりも強大な相手と対峙^{たいし}した経験が、彼女の観察眼に経験と落ち着きをもたらしているのだ。

現にリコッタは、エステル^{エステル}の根柢のない言葉と握られた手に、安堵^{あんど}を感じていた。理屈ではなく、絶対の自信と信念が伝わってきたからだ。

「不思議ですね。エステルがそういうと、易々と止められる気がします」

「易々とはいいまいだろうけど、止められるよ」

「信じてます。……リーダー」

「えっ、今なにかいった？」

「いえ、先に魔法を当てますね。ジンよ、力をお貸しください……。《大旋風》!!」

風の上位精霊ジンの名を呼ぶと、複数の旋風^{せんふう}が竜巻に向かつて飛んでいく。竜巻の巨大さに比べて小型ではあるが、複数呼び出されたそれは、竜巻の周囲を取り囲むように動く。回転数の違う竜巻同士がぶつかりあい、取りこまれることで、急激に勢いが落ちた。

「すごい、竜巻の勢いが一瞬弱まった」

「数を撃てば止められるかもしれませんが、《大旋風》^{ウインドストーム}は今のわたしには魔力の消費が多くて……。魔力があったとしても、連続で撃てるのは十が限度です」

「任せて。《火球》^{ファイアボール}はそこまで消費が大きくないから数を撃てる……。出でませい。天を焦がす炎と石壁崩す衝撃よ。爆ぜて散れ。《火球》^{ファイアボール}!!」

五発の火球が、竜巻の真ん中から下までを爆破^{ばくは}で包む。

「このぶんなら……止められるわ!!」

エステルは、懐^{ふところ}に入れている魔力が魔力を使い果たして崩れる感触^{かんしよく}に不安を覚えつつも、手持ちの魔力の量と自前で使える魔力の残量、そしてリコッタの強力な魔法があれば、決して不可能ではなさそうだと確信する。

（魔法で竜巻を叩き伏せる。そんなことができるなんて、考えたこともなかった）

リーズンは、わかっていてリコッタに任せただけだ。竜巻に魔法をおつけて止めた経験でもあるのだろうか。少なくとも、それに近いことはしたことがあるのかもしれない。そう思わせるくらいに、あのときは迷いがなかった。

この大陸でもっとも強力で有名な冒険者パーティ——『流れ星』^{リリーチンダスター}。

きつと、これよりもっと絶望的で手に負えない冒険をくぐり抜けてきたにちがいない。（わたしたちも、いつか『流れ星』^{リリーチンダスター}のようなパーティを……）

メテオ、アーティア、ガルーダ、リーズン、ハム、そしてこの町ができ上がったころには姿を消していたがマリアージュ。わたしたちもいずれは彼ら、彼女らのようになりたい。（今はまだわたしと、メルと、リコッタの三人だけど、お師匠様たちみたいに気のおけない仲間とこの世界を旅してみたい）

そのためには、こんなところでつまづくわけにはいかない。

エステルは、メテオからもらった魔法の発動体である腕輪に魔力を込め、《ファイヤージェル火球》の呪文を唱える。

(でも、リーズン様はこんな竜巻を四本も止めることができるのかな……)

炎の上位精霊イーフリートを従えているとはいえ、この竜巻は魔法の手数と威力がものをいう。

(やめよう。リーズン様のことだ。何か考えがあつてのことにちがいない。わたしはわたしのできることをする)

隣で精霊と交信しているリコッタと目が合った。

——どうやら、お互い考えていることは同じらしい。

一刻も早くこの竜巻を止め、できることならリーズンのところに加勢に向かおう。そう心に決めて、ふたりは竜巻に魔法を叩きつけるのだった。

5 炎使い

「楽しいなイーフリートよ。炎の魔法は楽しいな!!」

火の上位精霊、全身に炎を纏ったイーフリートの肩に乗り、リーズンはすこぶる上機嫌に吠えた。

イーフリートの全身からゆらめく炎が、リーズンを焼くことはない。

イーフリートは五メートルはあろうかという巨人で、上半身は鬼のような顔を持った裸体。下半身は炎に包まれ、足が見えない。空を浮くように移動しており、足は必要ないのである。

「ははははは。これほど炎の魔法を好き放題扱えるなんて『ジャハムの凍てつく迷宮』以来だ。柄にもない領主の仕事で溜め込んだ鬱憤をすべて吐き出してくれる!!」

心底楽しそうなウォルスタ領主の声を聞きながら、すこし下がってその姿を見守るのは三人。

完全武装の戦士、ハム。普段と同じ服装のガルーダ。そして猫族の戦士、メルだ。

いつもと変わらぬ様子でリーズンを眺めるハムやガルーダとは裏腹に、メルは目を白黒させて狂喜乱舞するウォルスタの領主を仰ぎ見た。

なにしろ、炎の巨人の肩に乗って強力無比な炎の嵐を連発しては哄笑を上げている。どこからどう見ても、ひとつの町の領主ではない。

いや、それどころか冒険者にすら見えず、ましてや森と自然を愛するエルフにはとうてい見えない。最大限に好意的な目で見たとして、長い間封印されていて身動きできなかった

た邪悪な魔法使いが、自由になって暴れまわっている——
そんなふうにししか見受けられなかった。

「——そうれ『炎の嵐』^{ファイアストーム}。ははははははは、この熱波と炎の眩しさ^{まぶ}。こうだ、魔法とはこうでなくてはな!!」

リーズンとイーフリートが繰り出す炎の嵐が、またたくまに竜巻のひとつを吹き飛ばした。

「イーフリート。次は右手の竜巻だ——行くぞ!!」

「承知」

左翼と右翼の竜巻がまだ残っているというのに、イーフリートを伴ったリーズンは鬼神のごとき破壊の魔法で誰よりも早く竜巻を消し去る。エルフラしからぬその姿を見たメルは、呆気にとられてガルダとハムに問いかける。

「リ、リーズン様すごい……!! でも、エルフって普通は、炎の精霊とかあまり使わないイメージがあったニャ。炎の精霊とめっちゃフレンドリーに話しているニャ」

興奮して語尾にニャをつけたメルが、素直な感想を漏らす。本人は直そうとしているのだが、興奮したりすると、猫族の方言が飛び出すのだ。

「おいらの知っているエルフも、普通は炎の精霊とか使いたがらないよう。普通は」
「リーズンを普通のエルフというのは無理がある」



ガルードとハムは極めて冷静だった。どうやら彼らにとって、この光景はそれほど驚くようなものではないらしい。

「リーズンは普通のエルフじゃないのニヤ。もしかして、闇エルフ……？」

「レッ、リーズンに聞かれたらミンチにされちゃうよう」

「ミ、ミンチ!？」

「ミンチはいすぎだ。……が、以前リーズンを闇エルフ呼ばわりした冒険者は、それに近い状態になっていたな」

——闇エルフ。

エルフが森と水と風を愛する種族であるなら、闇エルフは炎と闇と心を操ることを好む種族。闇エルフは邪神崇拜すうはいはいをしている。正統派エルフをそんなふうと呼べば、それは蔑称べつしやうにしか聞こえない。

「リーズンが炎の魔法を使うのにはこだわりがあるらしい。闇エルフ扱いすると、たまに本気で怒るから気をつけろ」

「メテオはよくその言葉を使ってケンカしていたよう」

「あいつらのケンカは仲のいい証拠しやうこだからな」

遠くからリーズンの楽しそうな哄笑こうしょうが聞こえてくる。

「リーズン様はどうして炎の精霊が好きなのー？」

「スカツとするからじゃない?」

「楽しいからじゃないか?」

身も蓋ふたもない即答に、メルはなるほどニヤ、と頷くことしかできなかった。

なんにせよ、そんな子供じみた理由もむべなるかなと思わせる喜びが、今のリーズンからは感じられる。

「メル、お喋りはそこまでにしておけ。リーズンが竜巻を片付けたら……いや、片付ける前にも俺たちの出番が来るかもしれない。猫族の鋭い目でよく戦況を見ておけ」

ハムは喋りながらも視線を竜巻の向こう側に向けている。この竜巻をもたらした者が先にいると確信している目だ。

「今は魔法使いのターンだが、最後にあいつらを守るのは俺たちだ。いつでも動けるようにしておくんだ」

「はいニヤ!!」

メルは瞳孔を開いて、リーズンの戦う姿を観察する。

そして、やっぱり悪の魔法使いにしか見えないニヤ、と呟くつぶやのだった。

この日のリーズンは絶好調だった。

冒険者のころは、『炎の精霊を好むエルフ』という評判でいつも白眼視はくがんしされてきた。喧けん